

子どもの虐待における第三者の在り方

宝剣みのり

- 1 はじめに
- 2 被虐待児と非行の関係
- 3 虐待が起きてしまっている場合の第三者の対応・そこに生まれる課題
- 4 虐待を未然に防ぐための第三者の対応・そこに生まれる課題
- 5 おわりに

1 はじめに

法務省は、2023年12月8日、令和5年版犯罪白書を公表した¹。非行少年の幼少期の逆境体験を初めて分析し、全体の約6割が家族から身体的な虐待を受けていたと回答していることが判明した。少年院在院者564人に、少年に対する調査として、小児期逆境体験の有無を調べると、61.0%の少年が、「家族から、殴る蹴るといった体の暴力を受けた」と回答した。また、43.8%の少年が「家族から精神的な暴力を受けた」と回答した。この調査によって、少年が非行を犯してしまう背景には、少年期に虐待を受けていたことが関わってきているのではないかと強く裏付けられることとなった。そこで、少年期に虐待を受けることを減らすことができれば、非行に繋がる行動をも減らすことが可能になるのではないかと考えた。

しかし、現状、虐待を減らしていくことはとても難しいことである。なぜなら、虐待は第三者から見えにくいからである。当事者がSOSを出さない限り、第三者は気が付くことが難しく、その結果、最悪の結末を迎えてしまうケースが後を絶たない。当事者が声を上げやすい環境を作ることもちろん大切ではあるが、それと同時に、第三者ができることも考えていくべきである。

そこで本稿では、虐待を減少・防止するために、第三者のあるべき姿を検討していきたいと考えている。ここでいう第三者とは、児童相談所などの機関を除いた、いわゆる私人と言われる立場の人間のことを指す。

2 被虐待児と非行の関係

少年の非行化要因においては、少年自身の問題や学校の問題、家庭の問題、地域社会の問題などが挙げられる。その中でも、親の適切なケアやしつけの欠如、家庭崩壊や親との離別といった家庭の問題が、非行の原因に関わっていることに注目が浴びている。例としては、ネグレクトによる食料難への適応行動であった食品盗みが常習的な万引きやひったくりに繋がってしまうことが挙げられる²。また、子どもが虐待を避けるため適応行動であった暴

¹ 令和5年版犯罪白書（2023年12月8日）、

〈<https://www.moj.go.jp/content/001407767.pdf>〉（2023年12月27日閲覧）

² 子ども虐待と非行の関係 〈<http://repository.seinan->

[gu.ac.jp/bitstream/handle/123456789/1619/hs-n14v1-p167-194-abe.pdf?sequence=](http://repository.seinan-ac.jp/bitstream/handle/123456789/1619/hs-n14v1-p167-194-abe.pdf?sequence=)〉

力避難からの家出が常習的な家出に繋がり、それが非行に繋がってしまうこともある。ここでは、虐待によって、非行を犯してしまう少年について詳しく述べていきたいと思う。

では、どうして虐待が非行に繋がってしまうのか。

まずは、虐待が子供に与える深刻な影響をみていきたいと思う。虐待を受けた子供には、「身体的発育への影響」「知的発達への影響」「心理的な影響」があると考えられている³。ここでは、「心理的な影響」について詳しくみていきたい。虐待を乗り越えても、適切な治療を行わなければ、生涯にわたり心に大きな問題を残したままになってしまう。いつ何時自分が危険な目に合わせられるか分からず、全く安心できない環境で過ごすことになる。親に反抗することもできず、自分の感情を必死に隠し、自分の体を小さく丸めて我慢するしか、方法を見つけれない子が多くいる。このように日常生活の緊張やストレスにより、怒りや恐怖の感情、過剰な覚醒、解離症状、うつ状態等、様々な心理的影響をもたらすことになる。このような心理的状況のまま、世の中にでてしまうことで、敵意や攻撃性をコントロールする力が弱くなり、依存的になり、自尊心や自己効力感が低くなり、情緒的には不安定で反応性が鈍くなり、世界戦も否定的なものになりやすくなってしまう。そうして、少年は非行に走ってしまうのである。

このように、少年が虐待を受けると、少年の成長過程の体に悪影響を及ぼし、結果的に非行に繋がる行動をとってしまうといった流れが起きやすいことがわかった。「はじめに」でも述べたように、法務省は犯罪白書で、非行少年が成育中に虐待を受けた過去を持っていることを示し、虐待と非行は結びついていることも証されている。

もちろん、虐待をされていても非行に走っていない人はいる。逆に、虐待をされていなくても非行に走ってしまった人もいる。虐待を受けたからといって、必ず非行に走ってしまうかと言われればそうではないことは言うまでもない。しかし、少年期に虐待を受けていた経験が、非行に走ってしまう要因になっていることを、否定することはできないだろう。実際に、川崎中1殺人事件の主犯である少年は、両親から、拳で殴られたり、足で顔を蹴られたり、長時間正座をさせられる等の虐待を受けていたようだ。家に自分の居場所がなく、不良のたまり場に出入りするようになってしまったことが今回の事件に至ってしまう根本的な問題点であると考ええる。せめて、家に居場所があれば、このような悲惨な事件を防ぐことができたと考えることができる。

そこで、非行少年を生まない社会を作っていくことが求められることがわかる。非行少年を生まないためには、少年自身の規範意識を上げていくことという少年自身の改革が大切だと思われているが、私は、それにプラスして少年期に逆境体験を作らないことも、同様に大切なのではないかと考える。そうであるなら、逆境体験の中でも特に影響が大きい虐待を減少・防止していくことが必要になる。

以下では、虐待を減少・防止していくために、第三者ができることを述べていきたいと思う。

(2023年12月21日閲覧)

³ 虐待が子どもに与える深刻な影響と心の傷のケアが必要な理由
〈<http://www.thinkkids.jp/genjou/reason>〉 (2023年12月27日)

3 虐待が起きてしまっている場合の第三者の対応・そこに生まれる課題

虐待が起きてしまっている場合、私人は、「速やかに通告する」ことが、一番にできることである。「何か変だ」と異変に敏感になり、すぐに声をあげるべきである。虐待は、密室化しやすく、第三者が問題を発見することはとても困難である。児童相談所や警察といった組織は、誰かからの通報がなければ、なかなか動くことは難しいとされている。このような点から、虐待を早期に発見することができる可能性を持つのは、近隣に住んでいる私人なのである。つまり、子どもに近い存在である私人が声をあげることが、子どもを救う第一歩になる。

虐待を受けていると思われる子どもを発見した方には、「通告」の義務があるとされている。しかし、通告をためらってしまう人も多くいる。匿名でできるとはなっているものの、通告者は知られてしまうのではないかという不安や、通告するからには「事実の確認」が必要なのではないかといった心配の声が聞こえる。それに加えて、報復されるのではないかという保身もある。

しかし、通告をしたが、虐待の事実が認められなかったとしても、通告をした方が責任を問われたり、処罰をされたりすることはない。また、通告する場合は、名前や住所を告げなくても構わないとしている。通告をした方や通告内容などについての情報が漏れることもないとしている。

また、私人が虐待かそうでないかの線引きをすることはとても難しい。実際に、誤通報されて苦しむ母親もいるようだ。通報を受けると、何があったかを調べられてしまうが、安全が確認できれば、すぐに退出すると言われている。近年、虐待の通報が多くなっていることから、もし何らかの間違いで通報されてしまっても、あまり重く受け止めることは必要ない。児童虐待の確信がないからと見過ごすことの方が、後に最悪な結果を生じさせてしまうおそれがある。ためらわずに通告することがやはり重要である。

4 虐待を未然に防ぐための第三者の対応・そこに生まれる課題

虐待を未然に防ぐために、第三者である私人は、近隣に関心を持ち、挨拶や声掛けの機会を増やしていくことが大切である。自分たちのことを気にかけてくれる人がいることを伝えていくことで、なにか困ったことがあった際に、頼ってみようかなという気持ちにさせることができる。

実際に、私の母は、近所に住む1歳児をもつ親に、積極的に声掛けを行っている。なぜ声を掛け続けているのかを聞いてみたところ、「お節介かもしれないが、常に声掛けを行っていれば、なにか助けになるかもしれない」との返答があった。声を掛けてくれる人がいるという安心感があれば、困ったことがあれば、その人に頼ってみようと思えることが容易になる。

このように、挨拶や声掛けは、日常の一瞬ではあるが、それが持つ力はとても大きなものである。このような行為は、年齢や性別を問わず誰でも簡単に行うことができる。近年、近隣住民との関係が希薄である傾向が高まっているが、挨拶や声掛けで改善していくべきである。そうすることで、近隣との関係が良くなったり、命を助けることができたりと良い循環

環が広まっていくだろう。

また、虐待を行ってしまう人に共通して言えることは、コミュニティの狭さである。悩み事があっても、相談できる人が身近におらず、その反動として、身近にいる子どもに暴力を振ってしまう。そうであるのならば、身近に相談できる人を作ることが効果的であると考えられる。誰かと気軽に話すことができる場所が存在することは、子どもを持つ親にとっては救いの場である。

そこで、地域に、子育てについて話すことができる場所を設立することが効果的であると考えられる。区役所や市役所など、公的機関に行けば、相談に乗ってくれる場所が存在している。しかし、自ら進んで、そういった場所に出向くことに気が乗らない人が一定数いることは事実である。そういった相談のしにくさを払拭するために、公園感覚で相談できる場所が、身近にあることが理想である。いつでも、気軽に話ができるように、そこで話を聞いてくれる人は、専門的な人ではなく、近隣住民が望ましい。気軽に立ち寄る場所を作ることにより、気持ちを吐き出せる場所などを設置しておくことが重要である。

東京都の大田区では、「ご近所さんサポーター」という事業を行っている⁴。0歳児を育てる家庭を対象に、月に一回、子育て支援グッズを届けたり、玄関先で親御さんとお話をしたりする。実際に私の母がこの事業に参加しており、訪問活動を通じて、地域の子育て世帯の身近な存在となっている。ここからもわかるように、子育て家庭との繋がりを作っておくことが重要になる。何度も言うように家庭は密室化しやすく、なかなか第三者が入ることが難しい。そうであるならば、第三者が積極的に繋がりを作っていくことが必要になる。

ここで問題になるのは、子育ての悩み事は、子育てを経験した人でなければできないことなのではないかということだ。確かに、子育て経験のない人に相談したいと思う母親は少ないだろう。しかし、だからといって、無力なわけではない。子ども側の考え方に立ってアドバイスすることが可能である。実際に、児童館で指導員として働いていた際に、「小学4年生の娘との関わり方がわからない」と相談を受けたことがあった。子育てをしたことがない私にとっては、とても難しい相談ではあったが、自分が小学生だった時のことを思い出しながら、アドバイスしてみると、「歳が近いならではの発想をありがとう」と言ってもらえたことがあった。子育てをしたことがないからといって、活動に参加しなくていい理由にはならない。学生も支援を行うことができることを伝えていく必要もある。

5 おわりに

本レポートでは、虐待と非行の関係を記し、第三者と虐待の在り方について検討した。その結果、第三者のあるべき姿を構築することができたが、課題も明らかになった。虐待の相談がしやすい世の中になり、相談対応件数が過去最多を更新している一方で、救えない命が増加してきてしまっていることも事実である。近隣住民との繋がりが希薄になってしまっている今、以前のような繋がりを再構築していく必要がある。誰もが、虐待の第三者であるという意識を持ち、地域と密着していくことが求められている。子どもたちの将来を奪わな

⁴ ご近所さんサポーター 〈<https://www.ota-shakyo.jp/service/05/gokinjyo>〉 (2023年12月21日)

いためにも、虐待を受ける子どもを無くしていくことが必要である。虐待から子どもを救うことができるのは、専門家だけではない。私たち、私人にも、できることが多数ある。相談件数を減らしていくために、一人一人の意識を変えていくことが今後必要となることが明らかになった。